

冷泉家本『明月記』頭書稿

—「冷泉家時雨亭叢書」『明月記』建久三年三月四月五月記から正治元年十二月記まで—

藤川 功 和

【キーワード】定家 日記

本調査の目的

藤原定家自筆の『明月記』を影印本として刊行した冷泉家時雨亭叢書『明月記』（朝日新聞社 一九九三年～二〇〇三年、全五巻刊行済）を通覧すると、記事本文の上欄に頭書が多く記されていることに気付く。それらの頭書は、「事」として記事本文の内容を要約したものと、記事を補記したものとに大別される。この内、前者については、定家が長年に渡って記し続けた膨大な「記事の索引の機能を果たして」いる。^(注1)それらの頭書を調査することの意義については、既に、尾上陽介氏が「どのような記事に首書が付けられているのかを全体を通して調べることで、定家が『明月記』を書いた主要な目的やその時期的変化などを知ることができよう」と的確に指摘されている。^(注2)これらの頭書は、従来活字本の底本として用いられてきた多くの写本類には見られないものであって、^(注3)尾上氏の提示された課題を考える

には、まずは時雨亭叢書の影印本を許に頭書を翻刻する作業から始めなければなるまい。そこで、『明月記』と記主定家との相関関係を考察する前段階として、頭書の翻刻作業を試みる。本稿では、手始めに時雨亭叢書第一巻の内、建久三年三月四月五月記から正治元年十二月記までの五巻を調査対象とする。今後継続して調査報告を進めたい。

頭書翻刻一覧表

翻刻の一覧にあたって、「記事内容の要約」欄を設けた。先述した尾上氏の指摘にある如く、定家がどういった記事内容について、頭書が必要と判断したのか、すなわち定家は『明月記』をどのように利用しようとしたのか、その全体像を明らかにするためである。一口に自筆本といっても、その性格は様々で、例えば本稿で扱う巻についても、建久三年三月四月五月記は、原本を後年書写した清書本であり、建久七年四月記、同年五月六

月記、正治元年十二月記は、最初に記事を書き付けたままの原本であることが、既に先学によって指摘されている。今後、頭書の翻刻が進めば、原本系統と清書本系統の頭書の比較といった視点も考え得るであろう。

【凡例】

- 一、上欄に記入された頭書の内、記事内容を要約しているものを調査対象とした。
- 二、字体は現行の活字体に改めた。
- 三、翻字本文に付した記号の内容は以下の通り。
 - 虫損等の破損を示す。活字本等によって本文の推定が可能な場合は、推定本文を右傍()内に示した。
 - 墨消しを示す。影印によって墨消しを施された本文の推定が可能な場合は、推定本文を右傍()内に示した。
- 四、表中の「紙数」の項は、冷泉家時雨亭叢書に拠る。
- 五、表中の「異同」の項は、頭書の活字本における所載の有無を示し、()内に活字本の書名を示した。(纂)は、史料纂集本、(国)は、国書刊行会本を示す。
- 六、頭書に記事本文の内容が要約されていない事項に関しては、「記事内容の要約」欄に、その要約の記事本文の記述順に示した。その際、頭書が記事本文のどこに位置するのかわを示す為に、「記事内容の要約」欄に網掛けを施した頭書を加えた。な

お、記事の内容要約の立項にあたっては、稲村榮一氏『訓注明月記』(松江今井書店 平成14年)の立項にならった。但し、稲村氏が立項していない項目を私に立項した場合には、その項目を()で括って区別した。

七、「記事内容の要約」欄中、人名等に適宜注記を加え、()内に示した。

〈建久三年三月四月五月記〉

目録	紙数	異同(活字本)	記事内容の要約
3月			
1	二	無	〔後白河〕 〔院に参る〕 〔兼実邸に参る〕
2			〔沐浴〕
3			御灯 _↓ 後白河院御惱 _↓ 兼実の下部、刃傷事
4			惟明親王御節供 _↓ 院参の人多し
5			〔定家兄〕 〔成家所労〕 _↓ 賀茂祭使の催を断る
6			院参の人多し _↓ (七条八条両女院に参る) _↓ (良経に見参する)
7			賀茂祭使の催嚴重
8			〔沐浴等〕 _↓ 岳父季能来たる
9			写経
10			〔式子内親王〕 前齋院女房姉妹来たる _↓ 後白河院重態
11			(蟄居) _↓ 季能来臨、院中物騒
12			院中火急の気あり _↓ 明日の射札の催を領状
13	5	有(纂)	〔後白河院〕 御崩御事 _↓ 依殿下仰参内定無人歎可触女房間事 _↓ 諒簡間事 _↓

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11		
		事又 一 座	聖護院宮御 齋會 <small>(殿下參給力)</small>	蓮華王院御 齋會 <small>(殿下參給力)</small>		曼陀羅供事	仁和寺宮御 今日御仏事四 座	定又々御仏 事三座		<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 仏事過差事 <small>(右府御力)</small>								仰云右大將 着烏帽子 着重服袍云々	
			24 無	23 無		23 無	22 無	22 無		21 無									20 無

16		15	14	13	4月	日付	頭書	紙数	異同(活字本)		
	仲頼給檢非違使事	可除服出仕之 事被仰仍不 扶日次除服 仲頼 藏人邦季追 爵事			兼光出家						
	1	1	1								
	有(纂)	有(纂)	有(纂)								

※1 当該頭書は、冷泉家時雨亭叢書当該記解題に翻刻あり。
 ※2 史料纂集本には、「等」字ナシ。
 (建久七年四月記)

2	1	30	29
御法事六十僧 御誦経使勤仕事 兼示中将示之事 雅行着位袍如何之由 宣陽門院御幸	前右大将御仏事 御法事六十僧 御誦経使勤仕事 雅行着位袍如何之由 兼示中将示之事 宣陽門院御幸	御布施間事議定事 八条院御仏事 御布施間事議定事 八条院御仏事 布衣の人多きこと 御布施間事議定事	宣陽門院初御幸事 式子ら、御仏事を催す
28	27	26	25
無	無	無	無

※冷泉家本では「五日、天晴 六日、天晴、入道殿令渡給」とあるところ、国書刊行会本では、「五日、天晴、入道殿令渡給、午時許着束帯参大炊殿、へ今日出仕、依召参御前之間、内大臣殿御参、仍退出、頭朝臣参内、参宮御方謁女房、帰路参向三条、夕帰廬」〔へは割り注を示す〕と、五日条に六日条が混入している。

〈建久九年十二月臨時祭祀〉

10	得 頭書	紙数 異同(活字本)	記事内容の要約 臨時祭舞人の催し↓兼実の教訓を受く↓舞人出入の作法 ↓着座の折の沓の作法↓勸盃の触れ↓勸杯の会釈↓挿頭 花の持ち方↓下臈の経路
----	---------	---------------	--

〈正治元年十二月記〉

10	得 頭書	紙数 異同(活字本)	記事内容の要約 (出行せず)
9			
8			
7	大臣殿文会事	2 無	大神祭↓式子内親王の病状↓坊門の病者を訪う 除目等
6			伊勢庄のこと、山法師に依頼↓三条坊門病者小康
5			八条殿に参る↓御堂懺法
4			態↓兼実室、八条殿に行く↓二品宮、院に入る
3			九条家に勤仕す↓式子内親王、病状増す↓坊門の病者重 からず↓歳末、その計なし↓終日、九条家に仕う
2	御堂有召詩哥会	1 無	三条坊門の病者を訪う↓八条殿御仏事↓御堂有召詩哥会 八条殿の上下和合す↓除目、近代は賂のみ↓病者、憑むべ
1			

29	身上事	13	無	除目。地下の身寒風の中↓三崎庄の所課を進上↓身上事
28				
27				
26				
25	頭弁為御使参事	12	無	伊勢御厨庄の使帰る↓兼実に従い八条殿に参る (沐浴)↓(良経に参る)
24	左大臣殿兵仗御舞事 トマリミサキ無之事	11	無	の事↓良輔、昇殿のこと↓良経拝賀↓トマリミサキ無之事
23	向戸部新堂供養所事	11	無	向戸部新堂供養所事↓左大臣殿兵仗御舞事↓斎宮卜定
22	兵仗隨身自院被仰事	10	無	病により終日僵臥
21				
20				
19				
18	宮御仏名事	9	無	兼実の御堂例講続く (例講の為、御堂に参る)↓馬頭を買う 神宮文書のこと↓諸所に向う
17	左大臣兵仗事	9	無	良経はか諸所に参る↓良経亭連歌会↓兵仗隨身自院被仰事↓良経亭の諸事
16	親王宣旨事	9	無	良経に参る↓左大臣兵仗事
15	第三皇子魚味事	9	無	
14	□定	8	無	諸所に参る↓知光来談↓第三皇子魚味事↓良経に兵仗宣下↓親王宣旨事 坊門病者危急↓在子、准三宮 (源)
13				
12				
11	小児魚味事 入夜女子着袴事	6	無	良経に兵仗宣下一定↓第三皇子立太子の聞え (宇成親王) 除目聞書 (清景来臨)↓坊門の病者、減気 〔定家息為家〕〔兼実女任子〕 小児魚味事↓良して中宮兼実に参る↓入夜女子着袴事↓中宮、院に入る 〔定家女〕

（注1）尾上陽介氏「『明月記』原本の構成と藤原定家の日記筆録意識」（『明月記研究』5号 平成12年11月）。

（注2）尾上氏前掲（注1）論文。

（注3）近世に入り作成された書写本の多くは、自筆本を親本とするが、大部分の頭書を無視している。なお、徳大寺家旧蔵本（現東京大学史料編纂所所蔵）は、書写年代が新しい転写本でありながら、自筆本等との校合がなされており、結果的に頭書等の自筆本の様態を多く留めている。尾上氏「史料編纂所所蔵徳大寺本『明月記』について」（『明月記研究』1号 平成8年11月）参照。

**The Headnotes of *Meigetsuki* in Reizeikesiguretei Library
The diary from March, April, and May of the third year of
Kenkyu to December of the first year of Syouji**

Yoshikazu Fujikawa

When we read *Meigetsuki* in Reizeikesiguretei library, which was published as a photoprinting of its original manuscript by Teika Fujiwara, we recognize that there are many headnotes in the main text.

These headnotes are classed as summaries of the main text or supplements to it. The headnotes function as an index of the enormous texts written by the Teika Fujiwara. The research on these headnotes will demonstrate his purpose in writing *Meigetsuki* and the changes he made while writing it.

These headnotes are, however, not found in the other apographs which were adopted as source books for printed editions. So the headnotes in the photoprinting should be put in type. In this article, in order to examine the relationship between *Meigetsuki* and its author, I typeset the headnotes of the diary from March, April, and May of the third year of Kenkyu to December of the first year of Syouji in *Meigetsuki* in Reizenkesiguretei library volume one.